



Title	『肖柏友弘等恋百韻』解題と翻刻
Author(s)	浅井, 美峰
Citation	詞林. 2025, 78, p. 66-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102897
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『肖柏友弘等恋百韻』解題と翻刻

浅井 美峰

解題

『肖柏友弘等恋百韻』は、連歌師の牡丹花肖柏とその門弟の友弘（宗訊）等によつて永正三（一五〇六）年九月一五日に張行された、全て恋の句で構成された百韻である。

本稿では、室町後期写と見える架蔵の一巻を紹介・翻刻する。基本的な書誌事項を以下に示す。

【表題】恋百韻

【内題】恋百韻

【紙数】八枚継ぎ。卷頭に内題「恋百韻」が記された後、連

歌懐紙の書式に則り、賦物と八句。第二～七紙に各

一四句、第八紙に八句と句上を書く。第二・三・五・六・七紙冒頭には、順番を示した「二」～「七」の書き入れあり。

注目されるのは書き様である。一三番句末尾の「秋くれて」

【寸法】縦一八糸。各紙の長さは、第一紙四四・六糸、第二

紙五〇・三糸、第三紙五〇糸、第四紙五〇・二糸、第五紙五〇・四糸、第六紙五〇・四糸、第七紙五〇糸、

第八紙三七・七糸。

【料紙】楮紙

【備考】書かれたのは室町後期と目されるが、現状の形に整えられたのは江戸期以降。

作品成立とそれほど変わらない時期に写されたという点で貴重であり、かつ他の諸本で欠脱のある箇所や諸本間で本文に揺れのある箇所を確認・補完することができ、当該作品を読む際に参照する価値のある本だと考える。

連衆の句数は、最後に句上がある通り、肖柏が二六句と最も多くの句を詠み、次いで宗全が二一句、宗坡・真存が二〇句、友弘が一二句を詠んでいる。一巡の最後、六番句に一句詠んでいる石文は執筆と推測される。

の「て」が「れ」の左隣にあり、作者名に掛からないように避けて書かれているように見える。このような書式（図3参照）は他の連歌資料にはほとんど見られない。通常の書式では、句を二行書きし、その後に作者名を書く。しかし本書では、先述した句の末尾の文字が一行に収まらず別行に書かれた箇所が散見されること、墨色が句と作者名で異なり、連続せず別々に書かれたように見えること、前の句に次の句の文字が重なって書かれていることから、先に句の作者が書かれ、後から句が書かれたのではないかと推測される。先に作者名を書き、後から句を書いていたために、句を書くスペースに制約が生まれ、このような書き様になつた可能性がある。

なお、『肖柏友弘等恋百韻』の内容については、「連歌の恋句について—作中主体とジエンダーリー」（『日本文学研究ジャーナル』三〇号、二〇一四年六月）の中で言及したことがある。併せて参考にいただきたい。

(2) 当該百韻の張行について、また、肖柏と友弘はじめ堺の門弟との関わりについては、木藤才蔵『連歌師論考下』増補改訂版（明治書院、一九九三年）に詳しい。

〈凡例〉

1、底本は架蔵本『恋百韻』を用いた。

2、翻刻に際し、できうる限り底本の体裁を保存するよう努めたが、以下の方針に従つて最低限、手を加えた。

3、各句の上に句番号（1～100）を付した。

4、仮名遣いは底本のままとした。

5、漢字は通行の字体に統一した。

6、改行は底本に従つた。

7、紙ごとの切れ目に閉じかぎ括弧（）を付した。

8、紙の順番を表す書き入れは省略した。

9、試案として読みをルビに括弧書きで示した箇所がある。

翻刻

恋百韻

附記 本稿は科学研究費（若手研究・24K15972）による成果の一部である。

〈注〉

(1) 京都大学附属図書館平松文庫蔵本、国立国会図書館蔵本に拠る。確認し得た他の諸本（大阪天満宮蔵本、天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵本、架蔵本）には年時の記述はない。

1 賦何船連歌
ちらすなよ秋に
心のした紅葉
しぐれも露も
うらみある比
肖柏
友弘

おもかけの立そふ
月を身にしめて
とこはあらしに
ひとりねの空
いつまでか夢も
みえこし夜はならん
千さとへたつる
中となりにき
われからのおもひと
しらは迷はめや
ゆふへのとかと
なにむかふらむ
たのめとは契らぬ
みねの松もうし
こゝろも人に
さはく雲風
袖をさへかき
くらせとや雨の音
月もかれなは
いか、あかさむ
と絶行宿は
浅茅生秋くれて
ねに啼虫や

14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3

肖柏 真存 宗全 宗坡 真存 石文 宗全 真存 宗坡

—

恋しさもしる
身の露もきえは
きえねと難面に
こゝろみゆとも
あはれかけめや
忍へた、あはぬ
物から名やたん
あらすといふも
われそくるしき
きぬの音人香も
それとほふ夜に
花もおもふや
あくる別路
さても又もろ共に
やははるの月
おなしかすみの
なかめたにせよ
馴し世は昨日の
ゆめの夕煙
残さしうらみ
かゝる山すみ
問ぬをもいか、
岩ふむ程とをみ

25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15

全 柏 存 肖柏 宗全 宗坡 肖柏 宗全 真存 宗坡 友弘

—

『肖柏友弘等恋百韻』解題と翻刻（浅井）

ころのまつそ
陰も木しけき
袖の上の泪の
種は見まくほし
たかなさぬしも
おもひあやしき
すむ月もなくさめ
とての秋の空
なぞ露のまも
われたにせぬ
結ひしはほのか
なりつる花す、き
たつねは行ゑ
風もをしへよ
われによる舟ち
ならめや遠つ人
いつとまくらの
なみの朝ゆふ
たちゐにもいのる
しるしはつれなく
なひくにならふ
ゆふしてもかな
いかきをも独し

37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26

存 全 柏 坡 全 柏 全 柏 存 弘 坡

—

こえはかひもなし
ちきりの末に
身をやおしまん
邂逅のまことに
おもひ絶もせて
たのむとなれば
おほきうきふし
大方のなさけ
たのむとなれば
おほきうきふし
待みる玉章に
いとひはてぬを
命とやせむ
さまゝのつらさは
たへぬ物にして
木葉しぐれの
袖そ色そふ
しきわひぬまとをの
あきのさよ衣
有明までと
いひし月かは
なみたなと鳴の
羽をとに尽すらん
したぶも人は
いなのさゝはら

48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38

全 柏 坡 存 柏 全 存 柏 坡 弘 柏 坡

はけしさはそれも
及はし湊かせ
こゝろにもた、
いさり火のくれ
哀ともみるめを
いつとたのま、し
かよはぬ間なき
よひ／＼の夢
関守もおもふ道
にはかたからて
名をむつましみ
こゆるあふ坂
忘られぬかけの
桜戸こもるなよ
花こそよすか
又もとひこむ
あた人に春やは
ならふまでしはし
うき帰るさを
雁もなく也
秋の田のかりそめ
ふしのしのゝめに
かけみし末や

柏 存 弘 全 坡 存 全 柏 存 坡 弘

—

さらにはなつま
よる／＼の月に
あこかれこひ／＼
ほとは雲井の
いもか悲しさ
余波さへ身を
くるしむる山みちに
おもかけはなを
かくれ家もなし
世をいつちいなは
おもひの外ならん
天地にみつ
なみたなりけり
あし原のはつかに
こそは見そめつれ
江による波も
たよりならずや
ことへよはかなき
一夜あかしかた
ほとゝきすにも
人はまたれす
橋をそての
にはひもあちきなく

全 坡 柏 弘 存 柏 全 存 坡 柏 全 坡

—

『肖柏友弘等恋百韻』解題と翻刻（浅井）

むかし馴しも
しらすかほなり
めかるればかゝる
物ともおもひきや
ならはしの身に
くれことの秋
消かへりいく露
霜にかこつらん
たえねかひなき
まつむしの声
月もはや今はの
人にうつろひて
かたるかうちに
みねのよこ雲
おもふ事いつかは
つくす空ならん
はなれかたくて
かゝるあらまし
心たゝあらいそ
を舟こきいてよ
うきしつみても
甲斐やなからむ
人に身はさかへ

83 82 81 80 79 78 76 75 74 73 72

存 柏 坡 全 存 柏 全 存 柏 坡 弘

—

おとろへへたりて
あさかみには
なみたこそそへ
夢計みしやは
影ものこらまし
かれはかれなで
なにおもひ草
萩の葉にをとつれ
きつ、秋更て
ふたりねぬより
あらふよの月
手枕にいつくの
露のみちぬらん
さはらんとせし
雨も過けり
せめてたゞゆふへも
われをなくさめよ
おもひやりつゝ
日こそなかけれ
この比の花鳥に
たにとひ侘て
しのへは春に
うかれしもせず

94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84

坡 柏 存 弘 全 柏 存 坡 柏 全 弘 坡

—

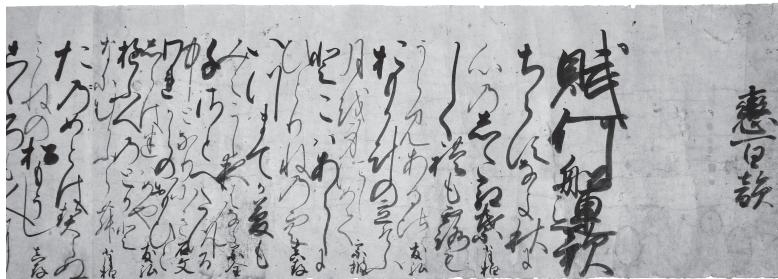
100	99	98	97	96	95
肖柏 友弘 宗坡 甘	廿六 十二 一	真存 宗全 廿一	月に今つけやら はやも更はて、 きくや過ゆく かりの一こそ	ならはいか、せん 雪みそれふる よるの中道	野山にもこゝろ うかる、物おもひ 身をのかるへき つらさともなし いひはれぬ濡衣

全 弘 柏 坡 全 存

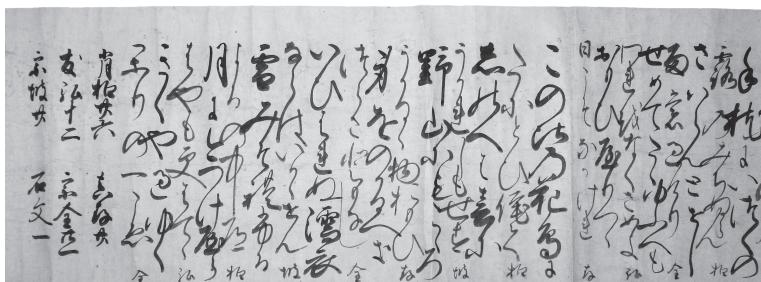
』

(あさい・みほ
本学准教授)

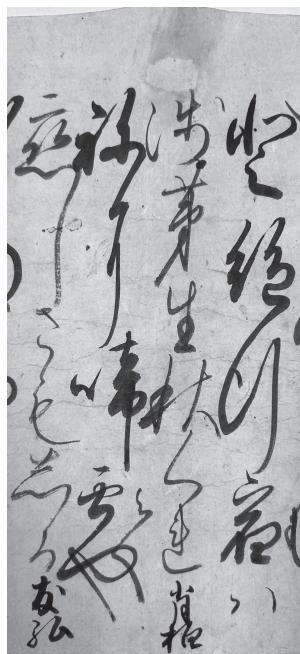
『肖柏友弘等恋百韻』解題と翻刻（浅井）



四
1
卷頭



[図2] 卷末



〔図3〕
一三・一四句